

大雪と学校の安全対策

2月1日(月)の夕方から雪になりました。雪というと子どもたちは大喜びですが、私たち大人は、出来ればあまり大雪にならないで、と願うものです。特に本校は山間部を抱えているという学校事情からなおさらです。本校には海拔千メートルを越える場所から通ってくる子どもたちが何人かいます。山間部の降雪状況、気象状況は平地とは随分と違います。

そこで、安全確認のため、1日の下校バスに教務主任が乗り込み、道路状況を視察しました。帰ってきてから聞くと、学校周辺はまだみぞれだが山間部は既に雪で積雪も記録している、県道をそれ脇道にはいると、積雪も多く滑りやすく危険である、という話でした。

学校では、明日の2日(火)の子どもたちの登校が心配でしたので、その日、子どもたちが帰るまでには、保護者向けの文書を(教頭先生が作成し)児童を通し各家庭に配布しました。教育委員会には、休校か何時間遅れの場合は、午前6時30分に決定し各家庭に連絡する旨、伝えました。給食センターとは休校の場合の連絡方法を確認しました。

翌2日(火)は、積雪状況、道路の凍結状況では休校措置や始業時刻を遅らせることも考えなくてはなりません。そこで、私は普段より早く学校に行き午前6時頃には着きました。すると学校の灯(あかり)が既に点(つ)いています。教頭先生がもう学校に来ていました。(教頭先生は住まいが山梨市ですから随分早く家を出たのでしょう)教頭先生と手分けして、幾つかの場所に電話を入れます。

- ①山梨交通営業所に尋ね、バスの運行状を確認します。
- ②保護者に連絡を入れ、清川方面の降雪状況を確認します。
- ③県道からわき道にそれてワゴン車が登る児童の家庭に電話を入れます。県道まで降りて来てもらえるよう依頼します。これは、昨日の様子から相当の積雪があり、急な坂道をワゴン車が上り下りするのは危険と判断したからです。

安全確認の電話を入れる中で、平常日課が可能と判断しました。「今日(2日)は平常日課」と決定しましたので各方面に伝えます。※ご家庭には、「平常日課の場合は連絡はない」ことになっていましたので連絡しませんでした。

- ④敷島中学校(敷島北小と同じ歩調を取ることになっています)に連絡します。
- ⑤教育委員会に連絡します。
- ⑥スクールバスの運転手さんに連絡します。
- ⑦職員に連絡します。

保護者の皆さんの中には、たいした雪でもなかったのに学校は大騒ぎを、と思われる方もおいでになるかと思えます。ただ、本校の場合は、山梨交通の路線バスが大雪や風水害により(敷島・清川線と甲府・昇仙峡線)が不通になった場合は学校を休校措置にする(当然、スクールバスの運行も出来なくなります)という取り決めがあります。これは、敷島北小がそれまで上三地区(かみさんちく)にあった3つの小学校(睦沢小 吉沢小 清川小・正確には清川小は8年ほど遅れて統合しました)を統合する形で誕生したことと関係しています。

多くの保護者の皆さん方は、今回、私が説明したことは(これまでも何度か説明があり)既にご承知のことと思えます。繰り返しになりますが、降雪時における学校の対応を理解していただくために、再度、お知らせしてみました。

完璧を求める心と技術に潜む弱点

新聞でトヨタ自動車が生産した乗用車のリコール問題が報じられていました。トヨタの最先端技術の粋を集めたハイブリッド車のプリウスにも欠陥が見つかったという報道には、驚かされました。

トヨタといえば日本を代表する自動車メーカーというだけでなく、世界一の自動車生産量を誇り、性能、安全性、快適性、デザインどれをとっても他国のメーカーが遠く及ばない優れた乗用車を生産していました。それが、思いもよらぬリコール問題に発展し、アメリカにおいてはトヨタの欠陥隠し(リコール隠し)に対し制裁金を科す、という動きがあります。日本がやっとな景気回復の兆しが見えてきただけにトヨタの失速はわが国の景気回復に耳の痛い話です。

さて、トヨタのリコール問題について、先週の日曜日(2月7日)でしたかテレビで討論会が行われていました。あまり詳しく見たわけではありませんが、その中に、次のような興味深い指摘がありました。

①世界企業になったトヨタは、世界各国に工場を造る必要に迫られた。トヨタは世界の国々に工場を造った。そこでは日本の物づくりの技術移転は進んだが、日本人の物づくりの心は伝わらなかった。今回の部品欠陥は物づくりの心の欠如が原因ではないか。

②今回の事件は日本企業とアメリカ企業の企業戦略の違いである。日本企業は製品を作るのに総力をあげ最上(ベスト)のものを作り市場に投入する。それに対し、アメリカ企業はある程度の製品(ベター)を作り、それを市場に投入する。そのため、日本企業は自社製品に対して強い自信を持っている。欠陥などあるはずがない、という自社製品に対する過剰なまでの思いがある。その自信が逆にトヨタを迫りつめることになったのではないか。

①、②両者の指摘に成る程と考えさせられました。でも、私は②の指摘により関心を持ちました。論者は次のように続けていました。

日本企業は英知を結集し、時間かけ、優れた製品を作る。その製品の完成度はほぼ完璧といっても良い程だ。その製品には、日本人の完璧を求める心が表れている。だが、どんなに優れた製品でも人が作るもの、どこかに欠陥はあるものだ。また、欠陥とまでは言えなくても人が使うもの、使っている間に微妙な感覚の違い、違和感が生ずるかもしれない。

それに対しアメリカ企業は、顧客が完全に満足する製品など作れるはずがない、と始めから考えている。だから、ある程度の製品を作り市場に投入する。すると、当然多くのクレームが寄せられる。そのクレームを取り込み、製品の改良に生かす。不断の改良を加え続けることで、最後には日本よりも良い製品に進化することもある。そして、次のように結んでいました。

物作りには、人様に使っていただくのだから恥ずかしくない製品を提供したい、という日本人の物作りの心は勿論大切だ。だが、批判を糧(かて)に自分を磨いていくアメリカ的な発想も必要ではないか。

この話を聞きながら、実はこのことは学校教育も同じではないか、という思いがしました。敷島北小にはこれまで先人が築き上げ、地域に根ざした優れた教育の伝統が脈々と流れ続けています。ですが、どんなに優れたものにも至らぬ点があるものです。

そこで私は今年度、保護者の皆様の声を聞き、その提言や要望、意見を聞くことで敷島北小を更に素晴らしい学校に出来ないか、と考えてみました。それが7月と12月に保護者の皆様をお願いした「学校教育への期待調べ」です。

この試みは、学校を良くするのに、学校職員だけで智恵を絞るのではなく、保護者の方々にも考えていただき、その感覚や智恵を生かしたい、そんな思いから行ったものです。来年度も引き続き「学校教育への期待調べ」を実施するかは不明ですが(私は退職ですから)敷島北小を更に素晴らしい学校にするため、保護者の方々からの声に耳を傾ける姿勢は持ち続けたい、そんなことを思います。